

各位

2025年2月28日



顕彰・研究助成対象者決定のお知らせ

2025年2月28日午前11時より、「古川医療福祉設備振興財団 第12回顕彰・第11回助成対象者」を決める選考委員会が開催され、下記のとおり決定いたしました。

■顕彰対象者（団体・個人）

1. 帝京平成大学 名誉教授 青木 主税 様

顕彰分野：社会活動

顕彰内容：国内における理学療法の礎を築いた理学療法士であり、義肢装具・福祉機器を研究・開発された研究者である。日本のリハビリテーション医療や理学療法、義肢装具学の基礎を構築されてきた理学療法士の魁で、これからも国内にとどまらず東南アジアのリハビリテーションの発展に導くキーとなる人物であり、その功績は当財団の顕彰規定に沿うものである。

2. 医療法人社団ゆみの 様

顕彰分野：社会活動

顕彰内容：LVAD治療は長期の補助・在宅管理が必須であるが、当初はLVAD付き患者を管理できる在宅管理施設がなかったところ、本法人の弓野医師はLVADの在宅管理を引き受ける我が国初のクリニックを東京都内で2012年に開設された。その後、このハートクリニック体制を東京外にも進めるとともに、LVAD患者のみならず、在宅でのカテコールアミン持続注射も可能とするなど、心不全の在宅管理の新しい道を切り拓いた功績は大きく、当財団の顕彰規定に沿うものである。

3. 平成医療福祉グループ 会長 武久 洋三 様

顕彰分野：社会活動

顕彰内容：我が国の従来急性期病院の問題点を分析し、漫然とした入院管理が患者にかえって悪影響を与え、生命予後を悪くするとの考えを多くの著書で発信しながら国の審議会委員も務められ、その改善を国に対しても訴えてきた。その結果の一つが2024年の診療報酬改定で、急性期病院に対して栄養管理やリハビリテーション、口腔内衛生に注意するよう通達が出され、ADLが低下した場合のペナルティも設定されるに至った。一方で、慢性期医療における改革のリーダーとして、入院によってかえって障害が出

る Hospital Associated Disability (HAD) の予防にも尽力され、高齢化社会における医療への警鐘を鳴らし続けてこられ、現状の医療制度の改革におけるオピニオンリーダーとして活動された功績は当財団の顕彰規定に沿うものである。

4. 日本赤十字社 高知赤十字病院 様

顕彰分野：建築設計

顕彰内容：2016年の設計当時、24時間365日稼働し厨房や滅菌などエネルギー消費が多い急性期病院のZEB化は困難とされていたなかで、本院は省エネ進化型病院計画の社会的意義を理解し、久米設計とともに意匠と設備の融合、運用まで配慮した設計を行い、日本の急性期病院として初めてZEB化を達成した。さらに、高砂熱学工業が設計から竣工後の施設管理の一部を請け負い、病院、久米設計と三位一体となって取り組んだ結果、基準一次エネルギーを50%以上削減し、日本初のZEB Ready認証を取得。病院管理者自らが設計意図と社会的意義を理解し、病院全体で省エネ運用を可能とする体制を構築した。開院後も病院管財課及びエネルギーサービス事業者を中心に、病院職員が一体となって合理的な運用を行い、基準一次エネルギー消費量を50%以上削減する効果を継続し、且つその実績データを社会に公開することで他の病院設計・運用の参考に大きく貢献してこられたことは当財団の顕彰規定に沿うものである。

5. 順天堂大学大学院 医学研究科感染制御科学 教授 堀 賢 様

顕彰分野：社会活動

顕彰内容：医療関連感染症対策について、日本では十分な普及がされていない時代からその研究に関わられ、医療現場に即した実学の普及に他職種領域（病院内各業種、建築設備関係企業など）にも働きかけを行い、積極的に活動を継続されてきた。

日本環境感染学会の活動は1980年代～2000年代まではドクターによる研究が主体であったが、2001年以降になり実際に病院内で活動する実践家が生まれ始めた。

この時期に先生はアジアでは初めての英国の感染制御専門医コースの修了証を取得、帰国後、未だ感染制御について体系的な理解が得られていない医療現場で積極的な改善、教宣活動を行ってこられた。

感染制御をベースにして、さらに医療の質向上と患者安全の確保が重要であるとの信念から医療のクオリティコントロールをよりシステマチックに進める活動を始められている（具体的にはJCI取得活動支援などの実績）。

感染制御という重要な課題に正面から取り組み、日本において臨床現場での地道な普及、教宣活動を（建築設備面の研究開発を含めて）継続して行ってきたことは当財団の顕彰規定に沿うものである。

6. 社会福祉法人 ライフの学校 様

顕彰分野：社会活動

顕彰内容：特別養護老人ホームによる高齢者対応から地域の学校の生徒らにホーム内の図書室で

の勉強対応をするなど地域に密着した社会活動を行っており、さらに庭を地域に開かれた場として提供し、災害時にも使える井戸を子供たちが日常的に使用するなど、屋内のみならず屋外においても地域の活動に配慮されている。幅広い高齢者対応とともに子供など地域社会への寄与も大きいといえる。地域に密着した活動を展開し、地域社会の支えになっている働きは当財団の顕彰規定に沿うものである。

7. 特定非営利活動法人 重度身体障害者と共に歩む会 代表理事 北村 叔子 様

顕彰分野：社会活動

顕彰内容：病院の看護部に勤務した経験や自身の子の療養生活から、治療後も重度の障害を残す人ができるだけ地域の中で生活できるように、重度身体障害者と共に歩む会を設立し、重度身体障害者共同生活援助グループホーム歩む会を開設された。四肢麻痺、常時人工呼吸器を装着したような入居者でも近隣の散策や買い物などができ、24時間対応の訪問看護は人工呼吸器使用者在宅療養や家族の生活を支えている。このような実績および現在の活動は当財団の顕彰規定に沿うものである。

8. 社会医療法人 博愛会 相良病院 様

顕彰分野：社会活動

顕彰内容：加齢とともに変化する女性特有の機能やホルモンなど、男性と異なる疾患や罹患率などに視点を当て、次世代女性医療のロールモデルの確立を目指している。医療機器においてはシーメンスとともにグローバルリファレンスに認定され、同社とパートナーシップ協定を結び、共同研究などで得られた知見を学会や社会に発表している。また、鹿児島県域特有の南北 600km にわたる離島僻地へ医師派遣や巡回検診車など地域医療にも積極的に取り組んでいる。首都圏でなく鹿児島という地方都市で、このような先駆的取り組みを実践してきた実績は当財団の顕彰規定に沿うものである

■研究助成対象者

1. 西九州大学 リハビリテーション学部 中村 雅俊 様

・高齢者における着座動作の円滑性に対する評価バッテリーの開発

2. 兵庫医科大学病院 リハビリテーション技術部 言語聴覚士 栄元 一記 様

・サルコペニア性嚥下障害患者における誤嚥を予測する鋭敏な指標の探索

■顕彰・研究助成選考委員一覧

委員長	河口 豊	滋慶医療科学大学大学院 特任教授 (工学博士)
委員	宇田 淳	滋慶医療科学大学大学院 教授 博士 (工学)
委員	大垣 昌之	社会医療法人愛仁会 本部
委員	小松 正樹	アイテック(株) 特任顧問
委員	角 晴輝	元 竹中工務店 専門役

委員	田中 一夫	(株)病院システム	代表取締役会長
委員	早川 澄	元 酒井医療(株)	代表取締役社長
委員	松田 暉	医療法人嘉健会	思温病院 特別顧問
委員	山崎 敏	トシ・ヤマサキまちづくり総合研究所	代表取締役
委員	山下 修司	(株)山下	代表取締役社長
委員	山本 行俊	(株)システム環境研究所	取締役相談役
委員	吉田 靖	滋慶医療科学大学	医療科学部 臨床工学科 教授

■本件に関するお問い合わせ先

一般財団法人 古川医療福祉設備振興財団 事務局
〒565-0853 大阪府吹田市春日 3-20-8 TEL: 06-6369-0130